

「わたしがわたしであるための日本語」を探す
－考えることから始める自己表現授業－

川口さち子 江原美恵子 丸山真子

本発表は、日本語学校などで規定の日本語コースを終えながら、日本語力の不足を指摘された留学生対象の、聖学院大学での日本語予備課程における「表現授業」の位置づけを考えることを目的とする。

当課程の学生は、教科書を使用する初・中級コースを終え、アルバイトなどの社会経験があるにもかかわらず、言いたいことを過不足なく伝える日本語力が備わっているとは言えなかった。そこで当課程では、教科書を用いる主要授業に加えて教科書を全く使わない「表現」授業を設け、その中心を「自己を見つめる」活動に置いた。

教科書を使わない理由は、受身的に学習してきたそれまでの習慣を排除させるため、「自己を見つめる」活動の理由は、自分が今どこにいて何をしようとしているのかを内面から自覚しなければ、言葉は空虚に使われるだけだと考えるためである。

授業は1. 自分を語る、2. 自分と他者を語る、3. 自分と身の回りの社会を語る、ことによって自分をさまざまな関係で捉え、最後に4. 過去・今・将来の自分と日本語との関係を考え、学ぶ意味を捉えなおすという4つの柱で行った。担当者は、①クラスで各々の作文を読み合い、自分の言おうとした意味が伝わったかを仲間の反応、質問で確かめる「場」が生成されるよう、②自分と他者を語る活動を通して「あなたから聞きたい、あなたに話したい」という環境での相互行為の「場」が生まれるよう、③自分と身の回りの社会を関係づけ、ディスカッションすることで「社会の中の個人」を自覚する機会が得られるよう、授業の進行と共に適切な課題を考えた。

授業では、与えられて一律に覚える日本語は存在しない。表現する日本語は活動を通じて其々が発見していくことになり、クラス全体の創出知となったと言えるだろう。最終課題は過去、現在、将来の自分を見据えた「今私は何を考えているか」という発表だが、それは同時に通常課程に進級した後の大学生活での自己課題の発見を促すものとなったことが実践結果から認められた。